学校法人 福島成蹊学園
福島成蹊中学校・高等学校
令和５年９月５日　NO.10
文責　校長　本田　哲朗

一 貫 コ ー ス 通 信

記録的猛暑に抗する、読書の効能考

地球温暖化は留まるところを知らない。日本に於いても誰もが異常気象に喘ぎ、危機を感じて居るに相違ない。特に、老齢な私は若い世代が担う次代が心配でならない。実のところ、温暖化の警告は既に私の大学時代に在った。某有名 Science 等の専門誌に、様々な、しかも多くの危機的な実際のデータが掲載されて居たのである。今を遡る 50 年前である。しかし、この忠告は空しく響き、ついに今日まで来てしまった感がある。また、客観的な科学に裏打ちされた事実より、人間社会は政治力学や経済優先に動く事を思うと、正直言えば科学者の無力感に苛まれ、ガッカリしてしまう。愚痴は兎も角、私は暑さには滅法弱い。そこでこの夏は“冬眠”ならぬ“夏籠り”を決意し、一週間は街に出ない事を決め込んだ。と言う訳で、５冊の本を読破した。その中から 3 冊を挙げると、以前購入していた沢木耕太郎著『天路の旅人』・次いでスベェトラーナ・アレクシエービッチ著『戦争は女の顔をしていない』・3 冊目は坂本龍一・福岡伸一共著『音楽と生命』である。ちなみに３冊の頁数を足したら 1300 頁を上回った。部屋の空調は 28 度に設定、空き時間はとにかく本を読んだ。やる事はそれだけなので、贅沢な時間でも在ったが、久しぶりに自分自身の受験勉強の思い出が蘇った。暑い夏はとてもしんどい…、だけれども‥‥ヒトは、必要に迫られその気になると、暑さ・寒さを忘れ、意外と集中出来る生き物なのだ。とは言え、今般の事は空調の恩恵が絶大であった事を否定しないでおこう。

何時の頃からは定かではないが、気付くと本（例えば教科書や参考書も）から学ぶ習慣が身についていた。言うに及ばず、これが楽しく思える様になったのである。従って、以後、暇な時間が在るのか…無い様な曖昧さはあるが、普通に文字を追う事の多い生活をしている。

ところで、このまま先の本に触れない訳には行かないので、2 著の概要だけに少し触れたい。『天路‥』は実在した“西川一三”が書き残した原稿（『秘境西域８年の潜行』）を基に、沢木氏が本人をルポ、以後足掛け２５年かけて完成させた大作である。西川は日中戦争の最中、モンゴルのラマ僧と偽り、密偵として 8 年に及ぶ期間を、満州から中国西域、そしてチベットからインドへ抜け、ブッタの３大聖地(ブッタガヤ・ルンビニー・クシナガラ)を行脚した。しかし、敗戦を機に露見し逮捕され日本に送還されるまでを綴っている。『戦争は‥』独ソ戦争(第二次世界大戦)時、ロシア(当時はソビエト)では十代半ばの多くの女性が医師・看護師を初め、諸々の兵士（戦闘員）として男同様前線で戦った。この実際のレポートをウクライナ出身でノーベル文学賞作家の著者が、狙撃兵等の戦闘員だった彼女達からレポした記録を基に一冊にまとめたのが本書である。いうに及ばず、これまで知られてこなかった生々しい事実が在りのままに綴られている。2 著に共通するのは、戦争に翻弄される人間の運命の姿なのだが、少なくとも、一時(いっとき)、これ等の著書は暑さを忘れさせる集中力を与えてくれた。